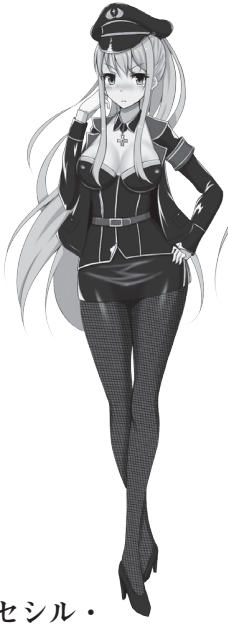
クールな女軍人がエッチなおねえさんに変わるまで
小説 夜士郎
挿絵 Zukky
立ち読み版

第一章　扉を開いたら　006
第二章　カゲキなマッサージ　039
第三章　彼女とお弁当とお風呂と　070
第四章　雌馬　108
第五章　なりきり女軍人！　143
第六章　女軍人拷問　185
第七章　一騎打ち　231
最終章　251

登場人物紹介

Characters



セシル・ベレスフォード

トリスフールで暮らすカズナの二つ年上の従姉。優秀な成績と美貌が相まって学園でも人気が高い。クールな見た目通り少々カズナに厳しい一面も。

カズナ・ベレスフォード

両親の離婚によりトリスフールで生活することになった少年。小柄で華奢な容姿のため女の子に間違えられることも。気弱でアニメやマンガが大好き。

セシルは従姉だ。これから先、ずっと付き合っていかねばならぬ親戚なのだ。
「……な、なあカズナ。いまのは、ほんとに――」
「ご……ごめんっ、今の、うそっ！」
「……なに」
瞬間、彼女は無表情になった。怖い。
「い、いや、男って……疲れたら、こうなるんだ。だから……その。これは生理現象で。うん。だからセシルが綺麗とかエッチとか、そんなことはぜんぜん関係ないよ。ほんとうに。まるで、まったく、これっぽっちも！」
念を押すように強調する。欲情されたなんて言われても女の子は嫌なばかりだろう。
「フム。なるほどな。生理現象か。これっぽっちかもか」
セシルが頷き微笑する。それにカズナはほっとして、
「うん。そ、そうなんだ。だから……」
ズボンを引き上げようとして――ぎゅむり！　と。
「うぎひぃいいいいッ！」
――凄まじい圧搾が肉根に襲いかかった。
セシルの右手がペニスを握りしめている。万力じみた力で締め付けてくる。
「いいい、痛い痛いっ！　ちょ、セ……セシルっ⁉　な、なな、なにをっ……」

「いやなに。コレがこうなっているのも、疲労のせいなんだろう？」
だから――と続ける彼女のこめかみに、青黒い血管が浮いている、ような。
「こいつも、マッサージをしてやろうというのだ」
「ちょ、な、なんでっ……そんなコトッっ⁉」
「ふん。おとなしくしていろっ」
と。彼女はペニスをぎゅむぎゅむと、握って開いてを繰り返す。
そうしてその手をさらに上下に動かされると――。
「う……ああっ、くぅぅっ……⁉」
下腹に感電じみた痺れが駆け抜けて、カズナは腰を震わせた。
「ほぉ。これか。こういうのが弱いのか？」
セシルが口の端を吊り上げる。なんとも背筋の寒くなる微笑みだ。
「あ、あの……セシルさん？　もう、それくらいで……その」
「うるさいっ！」
諌(いさ)めようとするカズナに、軍人少女はにべもない。
カズナは仮性包茎である。
少女のしなやかな指はその余り皮を捕まえて、扱こうとしている。
「まったく、こんなに膨らませてっ……恥ずかしくないのか」

セシルの指が上に動けば包皮がぐぐっと引き上げられて亀頭を半ば包み込む。
そうして下へ動けばべろりと包皮が捲れ、敏感な肉鞘が空気に晒される。
「だ、だってっ……あああうっ！　うあっ！」
余り皮を擦過されるたびに、波のような悦楽が押し寄せては引いていく。腰をヒクつかせるほどの快美な刺激に、カズナは悩ましげに身悶える。
「うっ……く、ふぅっ、んっ……」
「な……なんだ。妙な声を出すな」
眉根を寄せて身を捩る少年のその様子に、セシルが片眉を上げた。
「だ、だって……これっ。気持ちいい……んだ、もんっ」
「な、なにっ。き、気持ちいい？」
セシルが驚いたように目を見開く。……もしかしたら責めていたつもりなのだろうか。
「うんっ……セシルみたいな……綺麗な女の子の手でチンポを扱いてもらうなんて……すごい……きもちよくなっちゃうっ……」
「ちっ……ちんっ⁉　げ、下品なことをいうなっ。それに、また綺麗だなどと嘘をっ」
冷厳な上官の柳眉が逆立つ。いよいよ激怒しようとした彼女へ。
「で……でもっ……！　セシルの大きな胸とか長い脚とかで、興奮しちゃって……。そ、それなのに、チンポをシコシコされちゃったらもう……たまらないよ」

「ち、チン……シコシコ……ッ⁉　な、なんという卑猥な物言いをっ」
「だ、だって……それが今、セシルがやっていることなんだよ？」
「あ……あ？　そ、れはっ……」
セシルがはっとしたように呻く。ようやく今、彼女はカズナの言葉によって、自分の行為を客観視できたのかもしれない。
部下の、従弟のチンポを握って手コキをしているというその現状を。
（よく考えなくても……これ、とんでもないことなんじゃ……）
親戚のお姉さんにチンポコキされているというその事実にカズナの下腹が火照る。
頭の中にドクドクと、熱いものが流れ込んでくる。
気持ちよくなりたい。もっと、もっと――その熱いものが叫んでいた。
「……せ、セシルっ……あの、その……」
もっと弄って欲しい。強く扱いて欲しい。脳を焦がすような強烈な欲求にカズナは、瞳にうるうる涙を浮かべて美貌の上官を見上げる。
「ぬ……」
セシルが、カズナのその目を相手に――たじろいでいた。
頬がぽっ、と桃色に染まっている。
「わ、わかった……そんなに物欲しそうに見るな。まったく、し、仕方のないヤツだ」

と、セシルはその可憐な手でまた欲にまみれた肉棒をシコシコとしごき始めた。
「いいか、コレはマッサージだ。マッサージなのだからなっ」
けしていやらしいことではないと、そう強調しながらの手コキである。
「うっ、ああっ……これ……すごっ……」
待ち望んだ快感、痺れるような陶酔が湧き上がる。
あれほどに自分に厳しかった上官に――ペニスを握らせている。こんなに汚いモノを握らせて、扱かせている。その事実がたまらなく陰茎を昂ぶらせる。
「こ……こんな感じで、いいのか……？」
最初の容赦のなさはどこへやら、こわれ物を扱うようにして彼女はしゅっしゅっと肉棒を擦る。男根に絡む指はまるで白い蜘蛛。肉の表皮を這い回り、甘い足跡をつけていく。
「ううっ……。な、なにか……透明な汁が出てきたぞ？」
先端からドロリと滲み出す我慢汁に、セシルが嫌そうな声をあげた。
「そ、それを……その汁を全部、出してしまえば、収まるから」
「おお、そうなのかッ……よし、わかった」
ゴールへの道程が知れたことに彼女はホッとした様子で、青い瞳に熱をこめてペニスを扱きあげる。さらに肉汁を絞り出そうとズリズリコキコキ愛撫していく。
「ああっ……いいっ……セシルの指で、チンポ、気持ちいいっ……」

まるで脳を直接撫でられているような快感に、カズナの腰がわなないた。
「だからっ……！　ち、ちんぽなんて……恥ずかしいことをいうなっ……」
照れたようなセシルのその声が――なんだか愉しい。
「だって、気持ちいいからっ。セシルの手でチンポコキコキされるのがっ……」
「うるさいっ、うるさいうるさいっ！　さっさとこの膿を出してしまえっ！」
しゅっ、しゅっ！　しゅこ、シコシコ！
「あ、うぅあ……ひんっ！　いい……ッ　あ、ああーっ」
気持ちいい――気持ちいい。
自分で「処理」する時とは、なんというか、感覚が違う。快楽の種類が違う。
さらにはセシルが手を動かすたびに、胸元の重苦しい肉球が軍服の前を引き裂かんばかりにゆさっゆさっと揺れるのだ。
「も、もっと……もうちょっと……強く、擦ってっ……」
「くっ……！　もうちょっとだとっ。こ、これくらいかっ」
きゅ、とペニスへの圧迫感が増した。カズナが頷くと、セシルは握った力をそのままに、また上下に手を動かす。指の腹が海綿体を圧迫し、亀頭へ向け血液を絞り上げる。
「あ、と……その。唾液をいっぱいつけてあげると、いい、かも」
敏感な肉棒が渇いた指の擦過でひりひりとしてきた。

「貴様……調子に乗るなよ」
ギロリと睨みつけながら、それでも彼女は唇を閉じ頬をモゴモゴとさせて。
「んっ……」
赤い口腔を晒し、ぬとぉ……と。溜めた涎をペニスへ垂らしたのだ。
（ふぁあああ！　お、おおおっ、女の子のっ、よだれ、よだれがチンポにっ……！）
こんな美人の――それも従姉の体液が。男の欲望器に絡みついていく。
「こ、これで満足かっ。じゃあ、動かすぞっ！」
ぬるるっ、ぬるるるるっ！　ぬるぐちゅぐちゅるりっ！
「うひっ⁉　ひぃぃっ！」
ぬるつく涎の潤滑により手指は滑らかに男根を撫で上げていく。摩擦をなくした包皮は肉棒の半ばに留まって、敏感な亀頭が少女の手の平で直接刺激される。
「ああああうっ、そこ、さきっ……きもちぃっ、ああぅうっ！」
ぐちゅるっ、くちゅ！　にゅちゃ、ぬちゃる！
カズナの呻きに従うように、セシルは手の平で亀頭をコネコネ撫で回した。
「うう、くぅっ！　あ、と……下の袋とかもぉっ、触ると……早く終わる、かも」
「こ……こんな、感じか？」
と。セシルの左手が、肉棒の下にぶら下がる皮袋を包んでさわさわと揉んできた。

「ああぁぅっ、ああーっ」
脳髄を沸かせるような多幸感に包まれてカズナの身体がうねりあがる。
「お、おいっ……⁉　大丈夫なのか」
「だ、大丈夫っ、だからっ……つ、つづけてっ」
こんな行為をさせている従弟へ、彼女は気遣わしげな声をあげてくれた。
罪悪感がチクリと刺激されて――それもまた、快感を強めてしまう。
ぬちゅるっ、ぐっちゅ。にちゅにちゅ、にちゅ！
右手でペニスをぐちゅぐちゅしごいて左手で金玉をさわさわ撫でてくれる美少女従姉。
その美麗な手から放たれるいやらしい粘音が、部屋の中へと響き渡る。
「ああっ、くぅあっ……んっ、うぁうぅ！」
手指の形作る輪が肉幹の皮を剥ぐように擦りあげて亀頭を撫でいく。襲いかかる快感にカズナの腰がぐぐっと反りあがる。
「うおお……すごい、熱い……これ。まだ硬くなるのかっ……」
セシルもだんだんとその行為に熱中していく。手だけではなく身体も使ってカズナの股間を過激にシェイクだ。そのせいでぶるんっ、ぶるるんっ！　と揺れ踊るたわわな乳房があまりに扇情的だった。
力の籠もった少女の美脚、それを包むストッキングは汗ばんでしっとりと輝いている。

（きもちいいっ……よすぎるっ！　あふぁぁあぁあっ……！）
快感の波状攻撃を受け続けて、頭の中が白んでいく。
「あっ……ああうっ、くぅんっ……ふぁあんっ」
汗にまみれ、眉根を寄せて――カズナはまるで女の子みたいに身悶えるのだ。
それを見下ろすセシルが、ゴクン、と、喉を鳴らして。
「……か」
呆然と。
「可愛、いっ……？」
呟く。
――セシルの手が止まっていた。カズナのうちで情欲が、不満げに身を捩る。
「ううっ……せ、せしるぅっ……！」
切なげに……高い声音で、カズナは呻いていた。
「あ、ああ……。わ、私は……なにを？」
何かを振り払うように銀髪を揺らして、彼女は「マッサージ」を再開する。
「うう、すごい……どんどん……カズナのから、ヌメヌメのが出てくるっ……」
ぬじゅっぬじゅっ……！　じゅこじゅこじゅぽぽ！
扱かれ続けてどぷどぷ滲むカウパー線液。ひりつくような快感に、括約筋が軋みをあげ

る。何かを放出したくて、でもまだ我慢したいと力んでいるのだ。
「くぅうっ、あくぅう！　っっ、ひくっ……うぁっ」
熱くてどろどろとしたものが、股ぐらに溜まっていく。
それがチンポの中をぐいぐいと上がってくる。
「も、もうっ……でるっ！　ぜんぶっ、ぜんぶぅっ……でるっ……！」
「そ、そうか、もうすぐなんだなっ……よし、んっ、それっ、出してしまえっ……」
ぐっちゅぐっちゅ。ぐちゅぐちゅ、ぐいちゅ！
セシルの手がさらに激しさを増して追い込みにかかる。ペニスは形が歪むほどに握られて、重苦しく胸を揺すりながらズボズボしごきあげていく。
さらに男の弱点である陰嚢への柔らかな愛撫も止むことなく。
「私の手で――いっぱい、出しきってしまえっ……」
美人先輩軍人のヌルヌル手コキでカズナは、いよいよ快悦の果てへと昇り詰めていく。
「あっ、ふぁぁ、あうあぁっ……！」
びくびくびくと腰が引きつった。
頭の中で火花が散った。そして――
「で、でるぅうっ！　うぁあぁあっ！」
びゅーっ！　びゅびゅっ、びゅーっ！

たっぷりの白濁が、セシルへ向けて噴出したのだ。
「う、うわわっ、な、なんっ、わぷっ！」
驚いた声をあげる従姉の顔面に汚濁がぶちまけられる。
爆発じみた興奮と快感とに勢いづいたそれは、さらに彼女の銀髪や重そうな胸の膨らみ、華やかなる軍服へも飛び散って、穢し尽くしていくのだ。
「んっ、くっ、うっ、ああっ！　なんだ、これっっ……！」
どっぴゅ、どぴゅ！　どぴゅる、ぴゅ、ぴゅっ。
精液が迸るたびに、たまらない快美に意識が遠くなっていく。
生まれて初めての——女の子による射精だった。
「きっ……きもち、いいっ……！　ああっ……！」
それまで自分の手で行っていたことを異性にされるというその羞恥がまた、めくるめく快感を呼び脳をとろかせていく。
「ま、まだ、出てっ……うあ、顔、どろどろっ……」
セシルのツンと高い小鼻がドロリとした精液に包まれ、真っ白い頬に飛び散る穢れはその黄ばみを際だたせている。左の目を覆うようにコッテリと乗っかった粘塊は眼帯さながらだ。銀色の前髪に、蜘蛛の糸のような粘つきが絡み垂れていく。
顎先から、どろぉ……と肉汁が滴り胸に落ち、その谷間を流れてスカートへと落ちる。

濃密な精臭が――あたりに漂っていた。
「す……すごい、出たな……。これが……男の精液。赤ちゃんのもとなのか……」
顔にかかったそれを手の平に拭い、青い瞳で見つめている。
（……セシルが）
上官が、従姉が……僕の精液まみれになっている。
「うわ、うわうわうわ……」
なんということを――してしまったんだ。
思考が冷えると、たちまち罪悪感が襲ってきた。
親戚の女の子に――従姉にだ。チンポを扱かせて、精液をぶっかけたのだ。
「ぼ、ぼぼぼぼ……僕、はっ……」
慌ててズボンを穿くと、カズナは。
「ごっ……ゴメンッ！」
ベンチに正座し深々と頭を下げる。即ち――ジャパニーズドゲザである。
「……フン」
彼女はこちらを一瞥して、深々と嘆息した。
「これは、今の行為は――マッサージだ。だろう、カズナ？」
「え……い、いや、それは」

確かに一部の業界ではこれをマッサージと呼ぶこともあるらしいが。
「ならば問題はない……気にするな。部下の身体を慮るのも上官の責務だ」
なんて言いながら、取り出したハンカチで顔や髪を拭いていく。ねちょねちょとしたそれは、むろん、そんな薄布程度では拭いきれない。
「ううむ、もう一度シャワーを浴びるか……一緒に入るか、カズナ？」
なんて無表情のまま、そんなことを言ってきた。
――彼女が何を考えているのか、もう、わからない。
「い、いやっ、いいよっ……！　僕、先に帰るからっ……！」
ぶんぶんと頭を振って、カズナは更衣室から逃げだしていく。
（な、なんて……一日だ）
異国へ訪れて記念すべき学園での初日は――そんな波乱に呑まれ終わったのだった。

サーモンピンクだった花肉は興奮とナメナメの刺激ですっかり赤く色づいていた。そのビラつきを舐めながら、ときおり膣孔にズボズボと舌を出し入れする。

「はぁあっ、んぁあっ！　いい、いいっ……おま○こナメナメ、うぁあ、きもちぃいっ」

悩ましげに眉を寄せ、牝鹿のような肢体をよじらせて喘ぐ悪の女幹部。

左手で美巨乳を揉み潰しながら――たまらない、と。

彼女の右手が囚われの女主人公へ嗜虐の鞭を振るう。

ビシィ！

「あぐぅぁっ！　……チュルレロっ！」

悦撃を受けるチンポを跳ね上げながら――カズナは一心にマ○コを舐めあげる。

緩み、なおさらにだらしなく口を開いていく淫肉の門。その門扉を撫で上げていって、先っぽにあるちっちゃな木の実をぞろりと舐めた。

「あああっ、はうぅ――んっ！」

とたん、セシルの背が反りあがり、ポニーテールがぶんっと跳ね上がる。眉が寄り合い、唇から舌を突き出す。過敏な反応であった。

（こ、ココ……？）

舌先でつんつんつつくと、「ひっ、ひっ」と小さく息を吐いて顎を振る。ネロネロとねぶると「ああ、ああうぅンっ」と甘い喘ぎを漏らしてカズナのペニスをピシピシ叩く。

（……ココ、弱いのか……な）

「んちゅるれるっ！　ちゅ、ネレロッ、レロっ、レロレロレロ！」

その反応の良いボタンを、集中的に舐めてみた。

「ッはひっ！　あ、んひぅっ⁉　そ、そこ、そんなはげひっ……！　くぅぁああっ⁉」

和式便器に座り込んだような下品な姿勢で、艶めかしく肢体をくねらせるセシル。きゅっ、きゅきゅっと、ダークグレーの制服が捩れて合皮の軋む音が響く。

「ヴチュ！　れちゅるぢゅる！　ちゅ、レロ！　ネちゅねちゅ！」

カズナの吐き出す舌の音も下卑たものだ。花ヒダをふやかすほどに舐め回し、膣孔にニュポニュポ出し入れしながら、淫核を何度も突っつき回す。

「んはぁヒィ！　そこ、そこキクッ……ぅう！　ビリビリっ、ビリビリきちゃうぅうっ！身体の全部っ……ビリビリしちゃうんだっ！　あン、あ、あひぃいい――っ」

網タイツからこちら側、セシルの汗まみれの股ぐらが朱く染まっていく。その悲鳴が切ないものになっていって、花唇から垂れ流す涎が温度を上げていく。

「も、もぅっ、ああ、イク、おま○こ舐められて、わたひぃぃっ……！」

美人女軍人のその腰がぶるぶると痙攣を始めた。ぎゅううううっ、と乳房を自らの手で握り潰し、背中をぐぐっと反りあげていく――そんな彼女のクリトリスを。

「はむっ」と甘く噛んだ。自分の亀頭がそうされたように。

「んひぃっ⁉」
瞳を見開く女幹部の細腰がガクガクガク！　と震え上がり。
「あああああッ！　イク、イクイク！　イクゥウウ――――――――ン！」
総身がピーンと突っ張って、網タイツに肉の腱が浮く――その狭間、クリトリス絶頂に焦がされるオマ〇コから、びゅっびゅっと体液が噴出してカズナの顔を叩く。
「んぶっ⁉　あぶぅぅっ⁉」
潮だ。潮を噴いたのだ。
それが便器じみた女装少年の顔面にびちゃびちゃとぶちまけられたのだ。
「あ、ああ、ああ……」
やがてセシルの身体はガクリと脱力して、カズナの胸板に乳房を潰しながらその下腹へ頭を横たえる。ぷりんっと上向くノーパンヒップ。そこに穿たれた肛門と、ほぐれとろけた性器が、息を荒らげるようにひゅく、ひゅくと喘いでいた。
「はぁ、はぁ、はぁ……ク、クッ……。なんだ貴様。もう、爆発しそうじゃないか」
セシルの目の前にて屹立する、黒い下着を纏った肉棒。
何度も叩かれて赤らんだそれが、女の子の欲望を漲らせて震えている。
「チンポを撲たれて、気持ちよくなったんだろう？」
「そ、そんな、コトっ……！」

「尋問だと言っただろう。偽ることは許さんぞ……」
絶頂を迎えたばかりの女体をゆっくりと起こすと、彼女は男根へと膝歩きで寄っていく。黒い下着をどけて、こちらに身体を向け直すと勃起した股間肉を掴んで、ふやけてトロトロの肉孔へとあてがった。
挿入れてくれる――かと思いきや、セシルはそのままの姿勢でニィと笑う。
それはまさしくアニメで女幹部が勝ち誇った時の怖い笑顔だ。
「あ、セ、セシルぅっ……」切なげに、女装少年が鳴く。
「クク……貴様の、いつもより大きくて硬いぞ。女装して、撲たれて……興奮しているんだろう？　正直に言えっ……」
掴んだ肉棒を、花溝に添って動かす。亀頭がにゅりにゅりとマン肉に撫でられる。
「う、ぁあ……ぼ、ぼくぅ……」
「ぼく、ではないだろう？」
なぁ、とセシルは言って、手にしていた馬上鞭の柄をネロリと舐め。
それをカズナのお尻に近づけて――ずぶぶっ！　ずぶぶぶ！
「うくぁああっ⁉　くひぃいっ⁉」
カズナの肛門へ、鞭の柄を容赦なくねじ込んできたのだ。
襲いかかる拡張感に目を見開く。痛みと共に奇妙な陶酔が脳へと流れ込む。

「っ、かっ……くぁっ……！　な、そんな、ぼ、ぼくのッ、くはぁぁああ！」
ぼくの――と言った瞬間に、柄を揺さぶられ直腸を抉られた。
「わ……私、私、ですぅっ……！」
「そう、そうだ。――なんだ。肛門に突っこまれてギンギンじゃないか」
セシルの握るペニスが苦しそうにビクビクと震えていた。
「ほら、正直に言え。撲たれて感じているのだろう、女装して興奮しているんだろう」
悪の女幹部そのままに、愉悦じみた笑みを浮かべてマ〇コにチンポを擦りつけるセシル。
（ていうか、セシルっ……なりきりすぎっ！）
アニメとかコスプレとか、そういうのに免疫も偏見もないからこうなってしまうのか。
「貴様ももっと気持ちよくなりたいんだろう？」
「……わ、わたしぃっ……！」
挿入れて欲しい――気持ちよくなりたい。気持ちよくして欲しい。
女装して、私と言わされお尻の孔を埋められて。
湧き上がる被虐感が――受け身の快楽を求めていた。
「……してるっ……。痛いので、女装で……興奮してる。お願い、セシルぅっ」
挿入れてと……涙目でおねだりしてしまう。
「……それは、私だからか？　それとも……誰でもいいのか？」

そんなことをセシルが訊いてきた。どうしてそんなことを訊くのか。
「セシルがっ、セシルがいいっ！　セシルじゃなきゃ、ヤダっ！　当たり前だよっ」
――被虐のヒロインは淫らな尋問に屈して、そう答えていた。
「ククッ！　ああ、いいだろう」
と女幹部は勝ち誇り。
「はぁんっ……」
ずぶずぶと腰を沈めていった。
「うわっ……！　あ、熱いっ……！」
これまでになく煮えたぎったセシルの膣内であった。
「はぁあっ！　なかで、貴様のがっ……ドクドク鳴っているっ、んんぁっ……！」
濡れた瞳でカズナを見下ろす彼女の姿勢は、おま○こにペニスをずっぽり埋め込んで床にヒールを打ち付けた下品なM字開脚だ。
「セシルのなか、あつくて、ああ、きついっ……くぅうっ！」
Mの字を描く股間部のど真ん中、鋭利な結合部では肉棒が根本まで孔に埋まった様がよく見えている。畳まれてむっちりさを増す網タイツの太股がたまらなくエロチックだ。
「あはぁ……！　いいぞ、んはぅっ……貴様の銃は燃えているな」
そんな姿勢だから腰の自由も効くのだろう、セシルの両手がカズナの腰に添えられて、

その細腰が８の字を描くようにうねった。
「んぁあっ！　そ、そんなっ、ああ、ああンっ……！」
肉棒が彼女の内側で捩れ、搾られる。下腹そのものを潰すような快感に、眉根を寄せて可愛らしく啜り泣くカズナもまた女装の影響に囚われている。
「ククっ……いいぞ、その顔。ほらもぉっと気持ちよくしてやろう」
セシルの腰つきは淫猥そのもの。その内側にカズナの肉棒を納めたまま、くねりくねりと腰を動かす。巨乳もまたその腰と同じ軌跡を描いてぶるるるるんと揺れている。
経験は浅いはずなのに、悪女に没入するとここまでのことができるのか。
「うぁあ……こ、こんなっ……んひぃいいい！」
さらにその悪女は背面に手を回して女装少年の肛門を抉る鞭の柄を揺さぶるのだ。
「ふぁ、ああぁっ！　い、いやっ……！　お尻なんかでっ、ああうンッ！」
脳天まで突き抜ける快悦にカズナの背が反りあがる。
「ん、はぁ……クク、孔をほじくられるって気持ちいいだろう？　なあ？」
「ああっ、感じたくないっ……ないのにィっ！　ふぁあ、あふぅううっ！」
――硬い柄に肛門を掘られて直腸を支配されていると、切ない何かが湧き上がる。
女の子に跨られて責められている。情けないのに気持ちよくて。
そう、今自分は……犯されているんだ。

「ああン……くぅうんっ。ふぅぁン！」
これまでに感じたこともない被虐の興奮がカズナの内でどんどん膨れあがっていく。
頭の中にトロトロと蜜のようなものが溢れ出す。眼球の裏がジンジンする。
膨張する被虐悦楽にペニスが弾けてしまいそう。
「っふっ、はっ、はっ、んくっ！　ああ、なか、貴様ので抉れてるっ……！」
ずっちゅ！　ずっちゅ！　ずっちゅ！　セシルが腰を上下に動かして、オマ〇コでペニスを扱きあげる。スクワットじみた動きだが、それに軍人少女は慣れているのだろう。
ポニーテールが踊り、砲乳が互い違いにぷるんぷるんっと跳ね上がる。
膣唇がカズナのペニスを、ぶちゅっと呑み込んではずるぅと吐き出してを繰り返して、そのたびに亀頭の傘が捲られて戻される。痺れるような快感だ。
「うぁああっ！　セ、セシルぅっ」
「ン、はぁあっ……！　ククっ、チンポ、私のオマ〇コでシコシコされるのがそんなに気持ちいいのか。可愛い顔でそんなによがって、ンッ、情けないっ……！」
赤みを増す唇から舌を吐き、爛れた瞳でカズナを見下ろして、女幹部は吐き捨てる。
そんな彼女の態度にまで興奮を覚えて肉棒を震わせる女装少年である。
「ああぅ、い、言わないでっ、そんな風にっ……んくあ、ああうっ、私ぃっ」
「女の子みたいだ、その声も。ああ、ゾクゾクするっ……！」

高揚を隠せない声色でセシルは呻き、網タイツの美脚を跳ねさせ尻を振りたくる。
ジュッボジュッボ、ジュボジュボ！　ジュボ、ジュボチュ！
ギュッギュッ！　と革の制服を軋ませながら繰り返される膣コキで射精欲を引きずり出されていく。下腹に溜まっていく肉汁の熱に炙られて、ペニスが震える。
「なかで、貴様のが……ビクビクしてる。出したいんだな、オマ〇コの中に？」
「う……うん。出したい……私、の、ザーメン、いっぱい出したいっ！」
涙目で頷く。もう、限界に近い。
「ああ、情けないっ……！　ふ、あっ……！　ククク、そんな貴様の情けない捕虜ザーメンを、私のハラで受け止めてやる、からっ……。感謝しろっ」
ばぢゅん！　バヂュン！　じゅぼじゅぶ！　まるでウサギ跳びのように跳ねる膝、細腰とおっぱいの上下運動が激しくなって接合部からの粘音がボリュームを増す。亀頭のエラが少女の内部で擦れまくり、膣孔から泡立つ愛液をにちゃにちゃと掻き出していく。
「ふぁあっ、ああっ、あっ、んあっ！　セシ、セシルっ！　で、でるっ」
快感が脳を満たしていく。頭の芯が白んでいく。
「あ、あっ……いいぞっ、出せっ！　貴様のザーメンをっ……！　わ、私のおま〇こにぃっ……！　んくぅ、ああ、わ、わたしも、もうっ……！」
ウンコ座りでポニーテールを上下に揺さぶる女幹部の、その声音が蜂蜜みたいにとろけ

ていく。首筋や細い肩、たっぷんたっぷん踊る乳房が、さぁっと朱に染まった。
うねりをあげる膣ヒダが、ギュムギュムとペニスを噛み締めて――。
そうしてさらにセシルがぐりっ！　と鞭の柄を掻き回す！
「あぎっ！　うぐぅう、そ、そこぉっ！」
肛門が歪み、ペニスが裏側から抉られて。
脳内で快感が――爆発する。
「あっ、あああっ、ひぁ――！」
びゅるびゅばあっ！　ドビュゥウ！　ドビュドビュビュゥゥウウ！
「くぅううっ！　ああ、捕虜の、捕虜なんかのザーメンがっ……私の中に、でてるっ！
捕虜の情けないザーメンでっ、いっぱいになってくぅうっ！」
白い喉を晒す少女の唇から舌が突き出される。眦を溶かす美貌が、細腰が、豊満尻が、
むっちり網タイツがガクガクと痙攣した。
びゅるるっ！　どぴゅどぴゅ！　びゅるびゅる！
「んひぃ、中出しでイクゥウっ！　あひぃい、ひぃあぁああ――――――――ッ！」
歓喜と恍惚とを高らかに、ポニーテールを揺さぶり唄う。
ドッピュドッピュと膣内にイカ臭いザーメンを浴びながら「あひぃあひぃ」とわなないて、悪の女幹部もまた膣内射精のオルガズムに流されていった。

「は、ぁあっ……セシっ……セシル、う、はぁあ……」
カズナの身体がだらりと弛緩する。
女装して犯されながらの吐精は、男の時のそれと違い奇妙な脱力感を伴っていた。
セシルもまた膝を落とし、カズナの股間に座り込むようにして、天を仰いではぁはぁと荒い息を吐いている。汗まみれの身体に、コスプレ衣装がぴたりと張り付いている。
「じ……尋問は……終わりだ」
「……それ、で？」
「どうやら貴様のチンポは……私のアソコが大好きみたいだな。それなら、いい」
そんなことを言ってセシルはまた、クク、とアニメっぽく笑うのだった。

「……いや、ちがう、ちがうんだ。あれは」
セシルが顔を覆った両手の、その隙間から覗く素肌は真っ赤であった。
「あれは私じゃない……私じゃないんだ。なにか取り憑いていたんだ」
どうやら我を取り戻したようで、床に座り込んだ彼女は恥辱と自責とで混乱していた。
「まさか、セシルがあんなドSで、エッチで、ヘンタイだったなんてねぇ……」
「うう」
まあ、まさかと言うほど意外でもないのだが。

「うん。大好きだ。だから、護ることができたんだ」
「フフ。そうか、そうだな。……ああ、そういえば」
と、セシルの手がカズナの襟首を掴んで引き寄せる。
「まだ、勝者にご褒美をあげていなかったな」
微笑んで。桜色の唇を――カズナのそれへ、重ねたのだ。
「ん……ちゅ。ちゅ……んちゅ……ちゅ」
小鳥が餌を啄むように、少女の唇が幾度も少年の唇を愛撫する。
厳めしい眦がわずかに緩んでいる。その碧眼にカズナの黒い瞳が映りこんでいて。
他にはなにも見えていない。
「セシル……んちゅ。セシル、セシルっ……ちゅ」
細い腰に手を回して、カズナも少女の唇に夢中になっていく。唾液をくちゅくちゅ、唇に塗り合う。そうしようと考えたわけじゃないのに――互いの舌が自然、絡み合う。
「はン……じゅる、ちゅ……んちゅ、ちゅぅ……カズナぁ、ちゅ……」
「れろちゅ……ちゅ。ん、セシル……ちゅう」
ああ――そういえば。
(これ……ファーストキスだ)
様々な行為を経て、初めて味わう彼女の唇。

それは勝利の味を伴って、格別だった。
「ふぁ……」
唇を離したセシルの顔はとろん、ととろけていた。
瞳は潤みきり、口の端から涎が垂れている。理性まで口づけに吸われてしまったようだ。
――欲しい、と思った。彼女の身体が欲しいと。痛烈なほどのオスの欲求であった。
突き動かされるがままセシルの上に覆い被さる。少女の殻を、包む衣服を剥いでいく。
まるで初心な乙女のように、彼女はなすがままだった。
幾度もカズナの指を埋めた乳房を晒し、ペニスを呑み込んだ秘所を晒す。産まれたままの姿となった彼女の白い肢体が、その時淫らに動いた。
「……ほら、カズナ」
両脚を大きくM字に開いて、丸見えのヴァギナを手指でくぱぁと開いたのだ。
「ご褒美の続きだ。ここにキミのザーメンをたっぷり流し込みなさい」
瞳を潤ませ、どこかとろけた声で言うセシルのそれは、命じていながらおねだりだ。
ペニスを引きずりだす。
「うん……。じゃあ、いっぱい……ご褒美、もらっちゃおうかな」
大股開きの狭間に膝立ち、勃起しきった肉棒の鈴口で開いた淫花へ口づけをする。
そのまま鈴口をクプ……と肉孔へ潜らせて、ゆっくりと腰を押し込んでいく。

「ああ……入ってくる。キミのっ、逞しいの、んっ……ふぁ、ああ……」
舟形の中孔に、ズブズブと潜り込んでいくカズナの肉棒。狭苦しい肉門により包皮が捲られて、感度の高い海綿体が熱い雌の襞に包み込まれていく。愛する人を抱きしめるように、ぎゅうっと締め付けてくる膣の道。その熱烈な歓迎ぶりにカズナは呻く。
「くっ、うぁぅ……。僕のチンポも、セシルのオマ〇コに……鍛えられてるよ……」
「フフ……。そうか。私のマ〇コ、従弟のチンポも強くしているのかっ……」
酔いのせいだろうか、従姉はそんなはしたないことをトロリと言う。
セシルの腰を掴み、ぐっ、ぐっと腰を動かす。子供が大人の女とセックスしているかのような体格差でありながら、肉棒とヴァギナのサイズは逆転している。
「んっ……んんっ！　あああ、カズナのがっ……なか、ゴリゴリしてるっ……！」
亀頭の傘に襞を削られてしなやかな美脚が震える。肉棒に拡張された秘唇は真っ赤に染まって、どぷどぷと涎を垂れ流している。
「いっぱい……キミので、私のなか……ああ、満たされているっ……」
眉根を寄せ、桜色の唇から嬌声を放ちながら——彼女はとても幸せそうだ。
「セシル……セシルぅっ」
ぐゅ、ぐちゅ、ぐちゅっ……。緩やかに腰を抽送させるたび、彼女の奥から泡立った愛液が掻き出される。甘い息を吐いて喘ぐ少女の肌は総身ピンク色に染まって、気持ちよさ

そうに豊満なヒップをくねらせている。
「フフ……私のオマ〇コ、大好きだな、キミっ……ん、ふぁあんっ」
「うんっ、うんっ。大好きだ。セシルの、ぜんぶっ。だからっ」
もっと、もっと奥を。もっと彼女の身体を感じたい――。
こみあげる熱い情動を腰に乗せ、肉棒を根本まで思い切り押しつける。
と――鈴口の先っぽが何か固いモノをグリッ！　と突き上げた。
「ぁあっ、ひぁああ――ッ」
とたん、ぐんっ、とセシルのおヘソが跳ね上がる。
「ん……なんだ、これ？」
何だか微妙に硬くて弾力のある肉の壁だ。初めて感じる行き止まりである。何度か腰を前後させ、その邪魔っ気な肉壁をゴヅゴヅと小突いてみる。
「んぁっ！　んぉおっっ！　そ、それッ、し……子宮だっ！　や、やめろぉっ」
セシルの下腹がうねりあがる。豊乳を互い違いにぶるんぶるん暴れさせ身悶えながら、熱い抗議をする彼女の――その口の端が引きつった。
「ふぅん……そう。しきゅう……」
顔の上を覆うカズナの表情、そこに浮かぶ笑みを見たがゆえだ。
子宮がそんなに近づいているのか。女の子の大事なトコロが。

ぐっ！　と腰を押し込む。興奮に脈動する亀頭がぐちゅるりと子宮をひしゃげさせ、
「はひぃいっ！」とわななくセシルの背が反り乳房が跳ね上がった。
さらにチンポを押しつけたまま、グネグネと腰を捩ってみる。ひしゃげたままの赤子袋が押され、その奥にある内臓までを圧迫する。
「や、めっ……！　そこ、キツッ……んひぃっっ、キツすぎっ、んぁあっ！」
ぶんぶんと銀髪を振るセシルがカズナの肩を押すけれど、まるで力が入っていない。
「すごい感じようだね、セシル。子宮も、こんなに弱いんだ」
「あ……ああ。ま、待て……待って。頼む、優しく……して」
少年の声に潜む何かに怯えたように、凛花の如き女軍人が懇願する。
「たぶん、無理。……だって僕をこうしたのは、セシルだから」
けれど彼の内で燃え上がる情欲は、彼女のそんな様子になおのこと盛りを増す。
「今から僕のチンポで、セシルの弱っちぃ子宮を……ズコズコ苛めてあげるからね」
「ひ……ひぃっ」
口の端を引きつらせながら――けれど少女の顔には確かな期待感があった。
ズグッ！　と腰を突く。グチュ！　と雌袋が押し潰される。
「ンクゥウンっ⁉　んはう、はうう――んっ！」
顎を仰け反らせて戦慄くセシル――股間から口腔までを肉の槍に貫かれたかのように。

ズッブ！　ずっぶぶ！　ずぶぶ！　ずぶっ！
被虐の肉孔を男根が強引に出入りする。先端がゴヅッゴヅッと何度も何度も子宮を叩いて、そのたびに女軍人の細腰が戦慄き打ち震えた。ドーナツ状の肉壁にべちゃべちゃとカウパー汁を塗りつけながらの強烈な打突は止まらない。
「ひぃっ、ひぃいいンッ！　おく、おぐぅうっ！　ないぞうっ……ひびくぅうっ」
貧弱なカズナはこの国に来てそれなりに鍛えこまれた。
その足腰は皮肉にも鍛えた本人を激しく責め立てるのだ。
「ああっ、セシルっ、セシルのしきゅう、きもちいいよっ、コリコリしてるよっ」
弾力に富んだ亀頭で子宮口を押し回すと心地よい跳ね返りがある。それを堪能しながら、チンポが収まっているはずの下腹をさわさわと撫でてみる。
「ああだめえっ、今そこ撫でられたらトロけるっ、とろけてしまうぅうっ～～～」
甘ったるい声を垂れ流すセシルの両脚が柔らかく溶けて左右に開く。顔の下でブルブル震えるムッチリおっぱいを両手で掴んで、ムニムニと揉み上げる。
「ひゃああンッ！　むねも、むねもだめぇええっ！　ああ、あああうンッ！」
細い肩をくねらせて懊悩するセシルのマ〇コがぎゅうう～とチンポを絞り上げる。
「うああっ！　セシルの……ココっ。僕のザーメンを欲しい欲しいって言ってるよっ」
「はあっ、ふぁあっ、そう、そうなんだっ……！　ジンジン、するんだっ、キミに叩かれ

た子宮があっ……熱くてたまらないんだっ、発情しちゃってるんだっ、ああーっ」
ズボッズボッとヴァギナを穿られ裸身を震わせながら、セシルは甘い声で啼く。
「私のカラダっ……キミのザーメンが欲しいって泣いているんだっ……！　ん、ああっ、イキたいっ、キミのザーメンでっ……ザーメンアクメしたいってぇえっ！」
官能に満ちて切ないその蜂蜜みたいな声音がカズナの下半身をゾクゾクと震わせた。
汗にまみれた女軍人の肢体が蛇のように妖しくカズナの下でくねっている。悩ましいほどに肉感的な美脚が震え、クリスタル片のような爪の輝く足指がわきわき蠢いている。
「セシルっ……！　セシル、セシルぅぅうっ」
「カズナっ……！　ああ、カズナっ……んは、んっ、んくぅはうう」
従姉と従弟、血の繋がる二人の肉が睦み合い絡み合い果てへと登り詰めていく。
「出す……よっ！　セシルの子宮っ……僕ので、いっぱいにするよっ！」
煮えたぎる肉壺を肉棒で掻き回しその内部に我慢汁を塗りつけるカズナの腰が震える。
「ああっ、出せっ……んはぁぁうっ、出して、出してっ……私の中に、キミの匂いを染みつかせてくれっ……！　あ、あぐうっ！　いつでも、キミを……思い出せるようにっ」
じゅぶっ！　じゅぼぶじゅ！　じゅぶぐぶじゅ！　激しいカズナの腰使いにベッドがぎしぎしと悲鳴をあげる。それは交合というよりも、一方的な肉槍の突き刺しだ。目前の獲物を、刺して貫き抉って穿って――少女の股ぐらを丹念に、蹂躙していく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!